

★参加者の感想・意見から

自分を振り返って

- 自分の知識や認識のなさに、恥ずかしさを覚えました。
- まだまだ自分自身の中に、障がいがある人に対する壁があることを痛感しました。
- 資料にある「障がい者というくくりを作らないでほしい」ということ、考えさせられました。自分も気づかぬうちに、障がい者と一般の人を分けていました。



理解し分かり合う大切さ

- かわいそうという気持ちが逆に傷つけている。かわいそうという気持ちを持たずに、接していくにはどうしたらよいか。
- お互いに分かり合えば、自然体でいられるのではないか。
- 人を理解し、時間をかけて関わっていくことが大切だと感じます。
- 自分では理解していると思って接していても、相手がどうなのか疑問が残る時があります。常に、自分が逆の立場だったらどうするか考えたいです。
- 障がいのある人のことを知るには、本人、家族に話を聞くのが一番分かりやすい。そういう人たちと接することが、障がいのある人の人権を理解する近道であると思います。

これから自分は…

- あまり気をつかすぎず、普通の人と同じように接していきたいと思います。
- 自然に無理なくできることからやっていくことで、継続していけると考えます。
- 障がいをもっている方がどのような手助けが必要なのか知らなくては、何もすることができないと思います。自分にできることは、まず全ての人へのあいさつ、声かけかもしれない。
- 障がいがある人と交流することが大切だと、改めて強く感じました。
- 小さい頃から障がいのある方々に出会い接することで、大人になっても「共に生きる」という気持ちを、しっかりと子どもたちに伝えていこうと思います。

小林講師のお話を聞いての感想

～障がいがあってもなくても、人がふれ合うプロセスは何も変わらない～



- お話を聞き、「障がい者を理解する」のではなく、「人を理解する」のだと感じました。障がいの有無ではない、人をよく知ることは何においても必要なことだと、改めて感じました。
- 「相手を知る→自分が何ができるか考える→実行する」これを繰り返すことで絆が生まれる。障害があってもなくても、人がふれ合う中でのプロセスは何も変わらない。一歩踏み出す勇気が大事だと学びました。
- 「(あの子が)かわいそう」という言葉に対して、「そうじゃないよ」と返せる的確な言葉を持ちたいと感じました。

障がいのある人が安心して外に出ることができる環境づくり（インフラの整備）と共に、私たち一人ひとりが何らかの形で、一歩踏み出して行こうとする決意を持たせた研修会となりました。

「障がいのある人の人権」を考える

「障がい者」というくくりはつukらない

9月27日（火）、町内の様々な立場から75名が参加し、講師に茅野市立永明中学校教頭小林久通さんをお迎えして、町人権教育研修会が行われました。VTR視聴と事前のアンケート結果をもとに分散会で意見交換し、最後に小林講師からまとめのお話を伺いました。

★VTR視聴「ワシントンポスト・マーチ」

からだは不自由だけど、剛は一生懸命生きている。悔しいとき、悲しいとき、「ワシントンポスト・マーチ」を口ずさむと元気になれる剛。

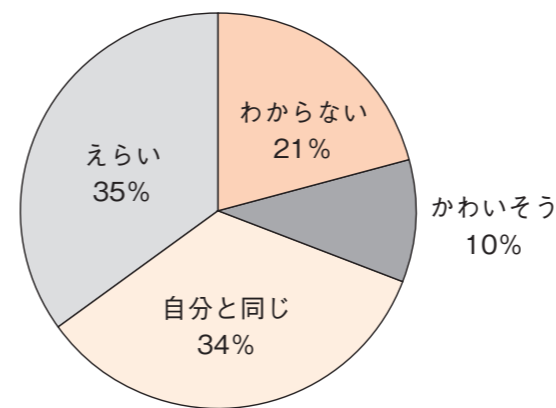
生まれたときの病気がもとで脳性マヒになった剛は、姉の結婚式出席をめぐって、親戚による差別という厳しい現実と直面する。「親戚中の恥だ」と言われたことに傷つく剛。散髪帰りに電動イスの自分を見る人の目の冷たさを察知した剛は、結婚式に出ないことを母に告げたのだが、姉の婚約者の言葉に笑顔を取り戻し、結婚式に出席する。



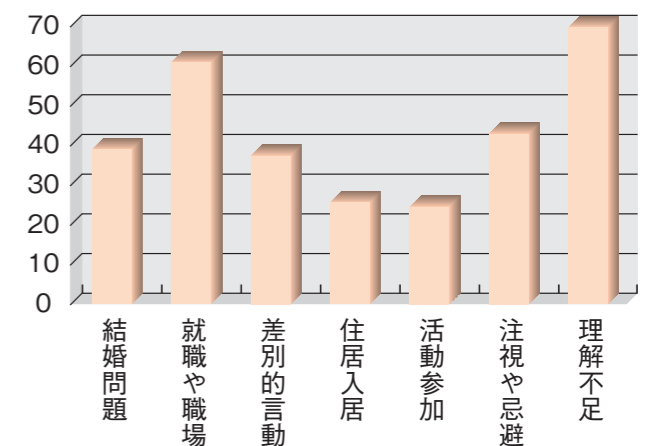
剛と同じ理由で、級友の美幸は身内の結婚式に出られなかった。出られないことで荒れていた美幸を気遣い、「結婚式に出なかった」と嘘をつき、美幸を喜ばせた剛。友だちへの優しい心を失わず、明るく前向きに生きる剛とその心情を、障がい者と世間体の視点から巧みに描いている。《「ぼくのお姉さん」(偕成社刊)の映画化 教育映像祭最優秀賞受賞作品》

★参加者アンケート結果から

障がいがある人をどう思いますか



予想される人権問題



障がいのある人とよく関わっていると答えている人の多くは、「自分と同じ。障がいをもっているも何ら変わることがない」と回答しています。「関わりが少ない」あるいは「関わりがない」と答えている人に、「障がいのある人の気持ちが分からない」と答える傾向があります。

また、予想される人権問題として「理解不足」が大変多く、続いて結婚や就職など、大きな人生の転機にあたって困難が多いのでは、と考えている人が多いことが分かります。